

令和二年度推薦入試 入学試験問題

小論文（人文社会科学部）

人間文化学科

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 問題冊子は、八ページ（表紙、白紙を除く）です。試験開始後、確認してください。
- ③ 解答题紙には（その一）と（その二）があります。解答はそれぞれの解答题紙の指定の欄に縦書きで記入しなさい。
- ④ 受験番号は、それぞれの解答题紙の指定の欄に算用数字で横書きしなさい。
- ⑤ 問題一、問題二のいずれにも解答しなさい。
- ⑥ 試験時間が終了したら、解答题紙の受験番号の書いてある面を上にして、（その一）を（その二）の上に重ねて監督員の回収を待ちなさい。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私のやり方は、結局のところ「わからないからやる」である。これはかなり、自信のある人間の言うことである。自信があるのか、バカなのか。普通の場合、これは「わからないけどやる」であり、「わからないけどやらされる」である。

「わからない」と「やる」との間は、普通、順接では結びつかない。結びつくのだとしたら、逆接である。ただの逆接でも、やっぱりまだ順当ではない。逆接に「やらされる」の使役がついて、やっと順当になる。「わからないけどやる」は、ほとんど「やりたくないけどやる」の同義で、だったらこれは、「やりたくないけどやらされた」にしてしまった方がいい。「やりたくないこと」はやりたくない。そんなことを「やらされる」のは^①クツジヨクである。そんな記憶からはさっさと遠ざかりたい。だから、「やりたくないけどやらされる」は、「やりたくないけどやらされた」の過去形に、さっさと変えられてしまう。

「逆接」の上に「使役」がくっついて、しかもそれは、「過去形」にしたいようなものですらある。「わからない」と「やる」との間には、そのようなギャップがある。「わからない」と「やる」とは、なぜ素直に結びつかないのか？ それはつまり、「わからない」が「恥ずかしいこと」だからである。

「わからない」は、普通「やらない」に続く。「わからないからやらない」である。それはどういう状態なのか？ つまりは、「考えるだけでぐずぐずしている」である。「恥ずかしがっている」がどんな状態であるのかを考えれば、「わからない」が「恥」であることはすぐわかるだろう。「考えるだけでぐずぐずしている」とは、すなわち、「^A恥ずかしがっている」である。「わからない」とは、「恥ずかしいこと」なのだ。

「わからない」という恥ずかしい状態であるにもかかわらず「やる」——日本人の美意識は、当然ここに「逆接」を選ばず。そんな恥ずかしいことを自分から進んで選びたくもないから、ここに「使役」を使う。「他人に命令されて仕方なく」である。そんな恥ずかしいことは忘れてしまいたいから、さっさと「過去形」である。これが日本人の美意識で、これを知らないのは、恥知らずである。「わからないからやる」が「バカのやること」かもしれないのは、そのためである。

「わからないからやる」が自信のある人間の発言であったとしても、この人間が「自信のある人間」と認定されるようになるためには、もちろん、かなりの時間がかかる。「自信がある」と「恥知らず」は、実のところ、表裏一体のあり方だからである。

「恥知らず」のハードルをいくつか越えようと、その先に「自信ある人」のゴールが待っている。しかし、その「自信ある人」が再びレースに出ても、その時のレースで必ず「自信ある人」のゴールにたどり着けるかどうかはわからない。「恥知らず」のハードルを跳びそこねれば、そこでその人はまた、「自信カジョウの恥知らず」である。「自信」と「恥知らず」は表裏一体なのだから、どうしてもそういうことになる——つまりそれは、人間が挫折を必須とする生き物だからである。

すべての人間が挫折を必須とする生き物である以上、「自信」はいつか「恥知らず」に変わる。べつに不思議のないことである。そして、人間が挫折を必須とする生き物である以上、すべての人間は、いつか「わからない」というシチュエーションにぶつかるものである。それにぶつかって切り抜けるのが人間である以上、「わからない」は方法論でもなんでもなく、ただの「当たり前」である。問題は、その「当たり前」がいつ「特別な方法論」に変わらざるをえなくなったのかということである。私はそれを、終わってしまった二十世紀という時代のせいだと思う。

二十世紀は、「わかる」が当然の時代だった。自分はわからなくても、どこかに「正解」はある——人はそのように思っていた。既にその「正解」はどこかにあるのだから、恥ずかしいのだとしたら、その「正解」を知らないでいることが恥ずかしいのである。「正解」が存在することを知らないでいることが恥ずかしくなかったのである。だから、人は競って大学へ行ったり、子供達を競わせて大学に行かせた。ビジネスの理論書を必死になって読み漁ったし、誰よりも早く「先端の理論」を知りたがった。それをするにと、現実に生きる自分達が知らないままに「正解」を手に入れることは、イコールだと思っていたのである。

たとえば、大学へ行くことを当たり前にして、多くの日本人は、大学がそうたいしたものではないという幻滅に訪れられた。しかし、それは果たして、「日本の大学がたいしたものではないから」なのか、あるいはまた、日本の大学に「自分達の思い込みをなんとかしてくれるだけの万能性がなかったから」なのかはわからない。だからこそ、「日本の大学はたいしたものではない」と思ってしまった人達の中には、「外国の大学だったらまた別かもしれない」という思い込みだっって生まれる。外国の大学へ行く

には金がかかる。「それだけの金がかかる以上、外国の大学にあるものは『本物』であるはずだ」という思い込みだつて生まれる。外国の大学には外国の大学なりのよさとすごさはある。しかし、それと「外国の大学だからすごい」という思い込みとは、別である。それが、「自分達の知らない世界にはまだすごいものがあつて、そこには『正解』があるはずだ」と思い込んだ結果なら、外国の大学だとて、「どうつてことはない」のである。

たとえばまた、大学を出て社会人になり、しばらくして壁にぶち当たることがある。その時に、「会社を辞めて大学に入り直す」という決断をする人もいる。それは、あるいは必要なことかもしれない。しかし、もしかしたらそれは、錯覚かもしれない。「社会に出て未熟な自分のメッキが剥げた」という事実があるのなら、その未熟さは、自分で克服しなければならぬ。その克服手段が「大学に入って学び直せばなんとかなる」であるのは、もしかしたら、^①ダンラクかもしれない。この人が、「自分は正解から離れた。大学には正解がある。その正解に近づけば、もう一度成功を取り戻すことができる」と思い込んでいるのだとしたら、この人のあり方は、「どこかに自分の知らない正解はある」と思い込んでいる二十世紀病なのである。

二十世紀は、イデオロギーの時代であり、進歩を前提とする理論の時代だった。「その『正解である理論』をマスターしてきちんと実践できたら、すべてはうまく行く」——そういう思い込みが、世界全体に広がっていた。そういう状況の中では、「自分の現実をなんとかしてくれる『正解』はどこかにある」という考え方もたやすく生まれるだろう。その人達は学習好きになつて、次から次へと「理論」を漁る。一つの理論がだめになつたら、もう一つ別のナントカ理論へと走る。思想さえもが流行になつたら、その後では、「流行」さえもが思想である。「それを知らなかつたら、時代からおいてきぼりを食らわされる」——そういう不安感の下では、流行もたやすく思想になり、であればこそ、二十世紀末には、わけのわからない「宗教もどき」がさまざまな事件を引き起こした。

「理論の合理性を求めて、どうして人は宗教という超理論へ走ってしまうのか？」——二十世紀末の「宗教もどき」が引き起こした惨劇に対して、多くの人達はこのように首をひねつた。しかし、その求められた「理論」が、「なんでも解決してくれる万能の正解」と一つだったとしたら、この矛盾はたやすく解決されるだろう。「なんでも解決してくれる万能の正解」は幻想であり、

これはそもそも宗教的なものだからだ。

二十世紀は理論の時代で、「自分の知らない正解がどこかにはあるはず」と多くの人は思い込んだが、これは「二十世紀病」と言われてしかるべきものだろう。「どこかに『正解』はある」と思い、「これが『正解』だ」と確信したら、その学習と実践に一路邁進する。二十世紀のそのはじめには社会主義があつて、これをこそ「正しい」と思った人達は、これを熱心に学習し実践しようとした。やがてそこにさまざまな理論が登場して、第二次世界大戦後の二、三十年間は、「イツセイを風靡したナントカ理論」の花盛りとなる。そこで激化したのは、子供の進学競争ばかりではない。大人だとしてやはり、やたら学習意欲で猪突モウシンをしていたのである。

学習——つまりは「既に明らかになっているはずの『正解』の存在を信じ、それを我が物としてマスターしていく」である。ここでは、「正解」に対する疑問はタブーだった。それが「正解」であることを信じて熱心に学習することだけが正しく、その「正解」に対する疑問が生まれたら、「新しい正解を内含している（はずの）新理論」へと走る——これが一般的なあり方だった。

「どこかに『正解』はあるはずだ」という確信は動かぬまま、理論から理論へと走って、理論を漁ることは流行となり、流行は思想となる。やがては、なにがなんだかわからない『混乱の時代』となつて、そこに訪れるのが、「正解である可能性を含んでい（はずの）情報をキャッチしなければならぬ」という、情報社会である。

どこかに「正解」はあるはずなのだから、それを教えてくれる「情報」を捕まえないといけない——そのような思い込みがあつて、二十世紀末の情報社会は生まれるのだが、それがどれほど役に立つものかはわからない。しかし、「『正解』につながる（はずの）情報を仕入れ続けなければ脱落者になってしまう」という思い込みが、一方にはある。だから、それをし続けなければならぬ。それをし続けることによって得ることができるのは、「自分もまた『正解はどこかにはある』と信じ込んでいる二十世紀人の一人である」という一体感だけである。だからこそ、情報社会の裏側では、得体の知れない孤独感もまた、同時進行でひっそりと広がって行く。情報社会でなにを手に入れられるのかは知らないが、情報社会の一員にならなければ、情報社会から脱落した結果の孤独を味わわなければならないからである。

そもそもが「恥の社会」である日本に、「自分の知らない『正解』がどこかにはあるはず」という二十世紀病が重なってしまった。

その結果、「わからない」恥は、日本社会に抜きがたく確固としてしまったのである。

しかし、その二十世紀は終わってしまった。終わって行く二十世紀には、「もしかしたらもう『正解』はないのかもしれない……」という不安感が漂っていた。どこにも「画期的な新理論」はない。理論の代用物でもあった「画期的なヒット商品」もない。パソコンやインターネットが画期的であったとしても、それがどこまで必要なかはわからない。なぜかと言えば、その『必要』は、「どこかに正解があるはず」という、二十世紀的な思い込みの上に存在するものだからである。

よく考えてみればわかることだが、「なんでもかんでも一挙に解決してくれる便利な『正解』」などというものは、そもそも幻想の中にしか存在しないものである。「二十世紀が終わると同時に、幻滅もやって来た」と思う人は多いが、これもまた二十世紀病の一種である。^B二十世紀が終わると同時にやって来たのは、「幻滅」ではなく、ただの「現実」なのだ。

(橋本治『「わからない」という方法』集英社による)

問一



①②③の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部A「わからない」とは、「恥ずかしいこと」なのだ」とあるが、どういうことか、本文の内容に即してわかりやすく説明しなさい。(八〇字以内)

問三 傍線部B「二十世紀が終わると同時にやって来たのは、「幻滅」ではなく、ただの「現実」なのだ」とあるが、これについてあなたの考えを述べなさい。(二〇〇字以内、改行はしないこと)

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕も「外国人」だったことがある。

三〇代の一〇年間を、タイ・バンコクで過ごした。記者として熱帯の街を職場にしていたわけだが、「よそもの」からしても実に住みやすい場所であつたと思うのだ。外国人だからといって蒙る不利益はあまりなかった。長期滞在用のビザや労働許可証の手続きがややこしいくらいだろうか。マンションはパスポートひとつあればその日から住めた。日本食には事欠かない。なにによりタイ人は、外国人とのつきあいによく慣れているようだった。バンコクには日本人だけでなく、欧米人、韓国人や中国人、インドや中東の人々なども生活していた。それに建設や飲食、工場などの現場を支えているのはミャンマー人やカンボジア人だ。隣に外国人が住んでいる、働いているというのはごく普通のことだった。

タイは歴史的にも地理的にも外国人を広く受け入れ、その力をうまく利用する形で発展してきた。けっこうな国際社会なのである。僕も日本人だからといって特別視されることもなく、かといって警戒や不審の目で見られることもなく、というよりは単なる隣人として放っておかれた。それは僕にとつては居心地が良かった。溶け込みやすい社会だと思つた。

そんなタイから帰国してみると、日本もまたずいぶん外国人の多い社会になつていた。コンビニでも居酒屋でも、どこに行つても外国人が働いている。はたして彼らはなぜこの国に来て、何を考え、どう暮らしているんだろう……そう思つたことが取材のきっかけだった。

調べていくと日本でもいつしか、たくさん外国人によってコミュニティが形成されていることがわかつた。

高田馬場に行けばミャンマー人たちが多く、インドのIT技術者は西葛西かさいにたくさん暮らす。神奈川県の大和周辺には、ベトナムやカンボジア、ラオスの人々が寄り集まつている。西川口は新しいチャイナタウンとして注目されている。

どうして彼らはその場所に集住するようになったのか。

コミュニティのできた背景に興味を持つて現地を訪ねてみれば、おいしい料理を食べられ、活気ある食材店が並び、あの懐かしいアジアのやわらかな空気に再び包まれた。日本の中に、確かに「異国」を感じる事ができたのだ。

そして、出迎えてくれた外国人たちが話してくれる物語に引き込まれた。日本を目指した理由、その街に流れ着いたいきさつ、いまの暮らしとこれから……。

彼らのたどってきた旅程や、日本での生活の実感というか息遣い、そんなものを伝えたいと思って取材を進めてきた。何を食べ、どんなときに笑い、日本の何を疑問に思いあるいは共感し、職場や学校でどう過ごしているのか。

昨今多くのひとの関心事となり刊行が続いている、いわゆる「移民本」には、さまざまなデータや専門家の分析、論評が連なる。それらも重要だがそこからは見えてこないもの……日本に暮らす外国人ひとりひとりの人格、人生を知りたいと、僕のタイでの「外国人体験」と何か共通するものはあるのだろうか、さまざまな街を訪ね歩いた。

「日本に住んでいるのだから、特定のコミュニティに引きこもるな」という意見もあるかと思う。

でも、^A海外移住というのはい、そうならざるを得ないものなのである。現地にある母国のコミュニティを、まずは頼りにする。

タイでも七万人の日本人が住んでいて、バンコクでいえばブロンボンやトンローといった地域に集住し、コミュニティをつくっている。そのあたりには和食レストランや居酒屋、日系スーパーや日本人の子供向け学習塾、そして日本語の通じる病院があり、日本人学校へと行き来するスクールバスが走る。そんな場所に並ぶ日本語のフリーペーパーや新聞や書籍のひとつを、僕は制作して暮らしていた。

こうした「日本人村」を母港のようにして、現地タイ人社会とゆるやかにつながっていく。そういう日本人が多かった。

これは日本人だけの傾向ではない。たとえばインド人も韓国人も、ロシア人やドイツ人も、自分たちのコミュニティをタイにつくっていた。誰しも、どんな国の人でも、母国のネットワークや生活インフラがあるからこそ、海外暮らしにチャレンジできるのだ。

そんな「異国」が、気づいていないだけで日本にもたくさんある。そしていま、これらのコミュニティを核にして、外国人が急速に増える時代を迎えている。大きくなりつつある外国人社会が、僕たちの生活空間に触れはじめてきたのだ。

やっと目に見えるようになってきた「日本の中にある異国」に、日本人は戸惑っている。生活習慣や文化の違いを前にして、

困っている日本人もいるだろう。でも、外国人の手を借りなければ、社会はもう回らなくなっている。で、あるなら、彼らがどんな人々であるのか知ったほうがストレスは少なくなるに違いない。そして外国人にもまた、日本についてより知ってほしい。日本の慣習も尊重してほしいと思うのだ。

両者が歩み寄る過程では、衝突もあるし誤解や不安を互いに感じもする。それもまたコミュニケーションだ。日本は、タイのような「隣が外国人」という社会の、その扉にようやく手をかけたところなのだろうと思う。これからぶつかりあいを何度も経験して、日本もようやくグローバル化とやらの時代に入っていく。

(室橋裕和『日本の異国——在日外国人の知られざる日常』晶文社による)

問一 傍線部A「海外移住というのはたいいてい、そうならざるを得ないものなのである」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。(八〇字以内)

問二 傍線部B「日本もようやくグローバル化とやらの時代に入っていく」とあるが、これについて本文の内容を踏まえた上で、あなたの考えを述べなさい。(二〇〇字以内、改行はしないこと)